

域外漢籍としての和刻本

はじめに

二〇一〇年代の中国で盛んになっている研究に、「域外漢籍」という分野がある。「域外」とは、中国から見た外国のこと。ただし国境は時代によって大きく変わっているので、その時々で中国国外だった場所を指す言葉として、「域外」が使われている。例えば唐代では蒙古高原は域外だが、元代および清代では域内となる。

さて、この「域外漢籍」がどのような書物を指すのか、簡単に整理しておきたい。

- 一、中国人の手になる古典作品あるいはその注釈書類が、域外で書写あるいは印刷されたもの
- 二、中国人の手になる古典作品あるいはその注釈書類に、

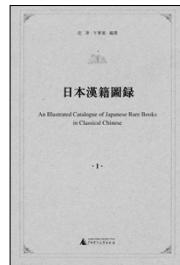
金木 利憲

域外の人物による注釈、解説が施され、域外で書写あるいは印刷されたもの

この二点のいずれかを満たすものが域外漢籍である。具体的には、中国周辺の漢字文化圏に属する国家、すなわち、朝鮮半島において製作された書物（朝鮮版・朝鮮書写本）、ベトナムで製作された書物（安南版、越版、および書写本）、日本において製作された書物（和刻本、日本書写本、漢籍旧鈔本）が該当する。よって、日本の図書館が所蔵している宋版・明版のような、中国で書写印刷された本で、現在中国国外にあるものは含まれない。

本書は域外漢籍のうち、日本において製作された書物に絞って作られた写真つきカタログである。全九巻、四六〇〇

沈津・卞東波編著
日本漢籍図録1-9



A5判 4656頁
 広西師範大学出版社
 [本体 138000円 + 税]

ページ超の中に、一八一〇種類の和刻本・日本書写本の書影を収めている大作だ。本書の特色は何と言っても、全種写真つきで紹介したという点に尽きるだろう。

先行する和刻本の目録としては、王宝平主編『中国館蔵和刻本漢籍書目』（杭州大学出版社、一九九五年）がある。これは中国の図書館・大学が所蔵する、およそ三〇〇〇点の和刻本を掲載しており、本書より収録数が多いが写真はない。百聞は一見に如かずということわざがあるが、これは書物にも言えることで、可能な限り本物を、そうでなければ写真を見るのと、目録や活字に翻刻したものを見るのでは、理解度が全く違う。

本書の構想は二〇一一年一〇月に始まり、本格的な作業に入ったのは二〇一二年一月以後だという。刊行が二〇一四年三月であるから、構想からわずか二年半足らずで完成したことになる。恐るべき作業スピードである。

しかし一読すると、スピード作業であつたがゆえに見落とされてしまったことも多いように思われる。以下、筆者の気づいた点を挙げて弁駁を加えてゆくことにする。

問題点

まずは、本書に掲げた資料すべてについて、書誌情報・所蔵者情報が欠落している点が挙げられよう。書物、とりわけ

中国関係の古典籍を調べる際には、題名（外題・内題）、刊記（刊行年、刊行者、刊行地）、版式、装幀、大きさ、その他特記すべき項目について調査するのが普通である。写本の場合は、刊行を書写と読み替えればいい。本書では、一点の本につき題と刊行年と写真で紹介している。その写真は用紙に合わせた同一のサイズにそろえられ、縮尺も示されていないので、原本の大きさを知ることができない。また、凡例には「図録選取每書之扉葉、第一卷第一葉及版權葉、部分漢籍收入了序葉或尾葉」（図録には各書の扉・第一卷第一丁、版權（筆者注：刊記のことと思われる）のある丁、一部分として始めの丁あるいは終りの丁を選び取った）とあるものの、実際のところは一書のうちどこを掲載するかという統一は取られていないので、不体裁に見える。唯一知ることができるのは、版式（二行の文字数・行数・界線・罫線の有無と版心様式）のみである。

ゆえに、和刻本漢籍を入手し、本書で素性を探って同定しようとしても、それは困難である。

更に、数少ない情報であつてもしばしば間違っている。困ったことに実に様々な例が挙げられてしまうのだが、ここでは巻一に収録されている『論語集解』と、巻六所収の白居易（白楽天）関係書、および本の分類に関する事例を紹介したい。

最初は『論語集解』についてである。本書には、No.145の論語集解十卷（三国魏何晏集解 室町時代末期刊本）およびNo.150の論語集解十卷（三国魏何晏集解 慶長活字印本）という、よく似た印面の二種が収められている（書名の後のカッコ内は、本書の付している解題である）。ともに毎半葉七行十七字、四周双辺小黒口に作り、黒魚尾である。No.145は無刊記、No.150は慈眼刊／正運刊／洛渢要法寺内開板という刊記が付されている。

No.150は慶長活字印本、すなわち古活字版ということであるから川瀬一馬氏の『古活字版の研究』を繙き、これらの書誌情報を検討していくと、本書の付す刊行年はともに誤りであることがわかる。まずNo.145であるが、これは慶長年間の整版無刊記本である。なぜ室町としたのか、間違いの原因を推測することはできない。

No.150は刊記から見て要法寺版である。要法寺は多く古活字版を出版しているのだが、ただ『論語集解』のみが整版本あるいは整版と古活字版とが入り交じった乱れ版であり、本書こそ、まさにその『論語集解』である。

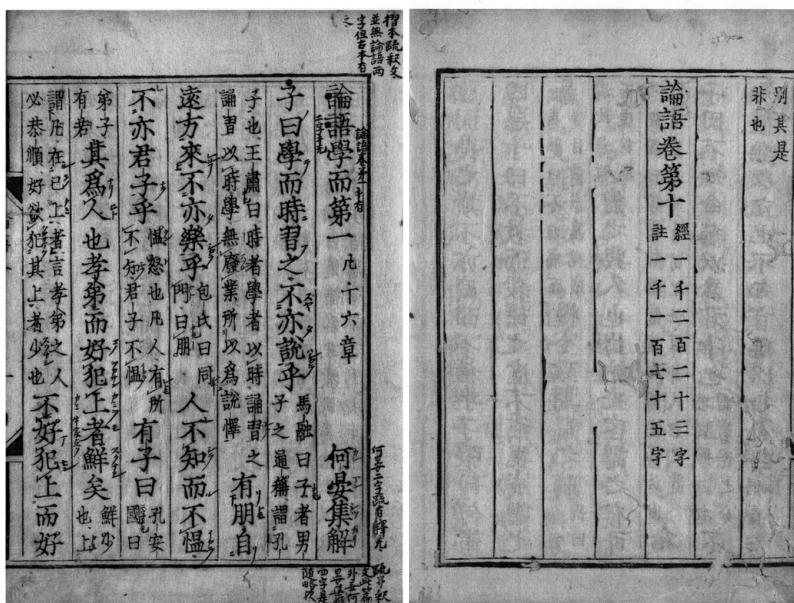
No.150を更に見てゆくと、書き入れと蔵書印から、所蔵者を知る手がかりが得られる。これをもとに調べていくと、現在の国会図書館蔵本（請求記号WA7-220）こそNo.150であり、浅野梅堂（一八一六～八〇、蔵書家・画家）、伊藤介夫（一八三三

～一九二二、幕末明治の儒者）、フランク・ホーレー（一九〇六～六一、英国人言語学者）、「月明荘」印の主である反町茂雄（一九〇一～九一、古書店主）の手を経て国会図書館に収まった書物だということが同定できるのである。国会図書館蔵本は、国立国会図書館デジタルコレクションとしてインターネット上に公開されており、解題も付されている。これを読めば整版であるということも明記されているのであるが、なぜ古活字版としてしまったのであろうか。加えて言うならば、古活字版ならばその印刷技法上どうしても匡郭（枠線）の四隅に隙間が生じてしまうのだが、No.150にはそれが見られないことから、古活字版とは言えない。

更に、No.150の書影は陰影の落ち方と解像度から見ると、デジタルコレクションで公開されているものに非常によく似ている。だがしかし、本書には底本の所蔵者や引用元に関する言及は一切ない。まこと不可思議な現象と言わねばならない。

続いて白居易関係書の事例を検討してみる。

本書巻六、No.1053から1058にかけて、『白氏文集』をはじめとした白居易作品集が挙げられている。具体的には次に示すとおりであるが、これについて現所蔵者の特定と記述の検討を試みたい。



漢籍図録 145 : 『論語集解』 (日本漢籍図録 p387・388 より)



漢籍図録 150 : 『論語集解』 (日本漢籍図録 p398・399 より)

よく似ているが、末尾の刊記の有無が差である。

No. 1053 白氏長慶集七十一卷 唐白居易撰 明馬元調校
日本立野春節訓点

明曆三年（一六五七）京都松柏堂林和泉掾刊本

No. 1054 白氏文集七十一卷 唐白居易撰 元和年間那波道
円活字印本

No. 1055 新樂府一卷 唐白居易撰 慶安三年（一六五〇）
片山舎正刊本

No. 1056 白氏選八卷 唐白居易撰 日本源世昭編選
寛政九年（一七九七）刊本

No. 1057 長恨歌伝一卷 唐陳鴻撰
元和二年（一六六〇）刊本

No. 1058 長恨歌伝一卷附琵琶行一卷野馬台一卷 唐陳鴻、
白居易撰
慶長元和年間活字印本

No. 1053 は、明版に訓点を附して日本で復刻したもの。刊記もあり間違いはないだろう。日本では『白氏文集』が一般的であるが、本書は明版を底本にしたため中国での書名である『白氏長慶集』となっている。

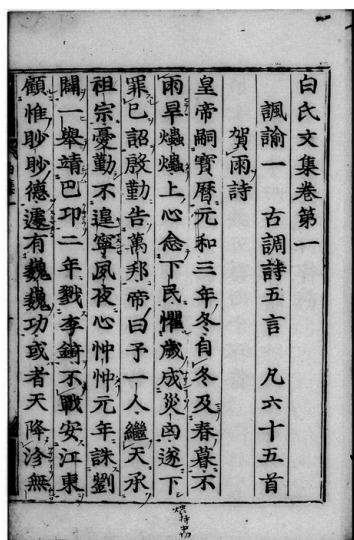
No. 1054 は、元和四年（一六二八年）、那波道円が角倉素庵の援助を受け、古活字によって印刷した、那波本と呼ばれる本である。

那波本は日本における『白氏文集』の標準的テキストとなっており、研究上重要な本である。現在、日本で存在が確認されている二十数本のうちから宮内庁書陵部所蔵のものを選んで『宮内庁所蔵 那波本 白氏文集』影印版（勉誠出版、二〇二二年三月）が刊行されている。

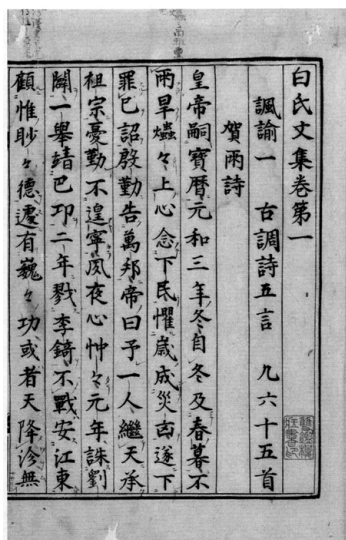
巻第一の一行目に「双鑑楼蔵書印」の印があり、これが清末から民国期にかけての政治家・学者である傅增湘（一八七二～一九四九年）の双鑑楼に旧蔵されていた書物であり、現在東京大学東洋文化研究所に収められている一本（請求記号：貴重・三六）であることが判明する。刊年は元和年間としているが、那波道円の手になる「白氏文集後序」を読めば戊午、すなわち元和四年と特定できる。

本書の大きな問題は、活字版ではない丁の写真を掲載したことだ。巻第一の第一丁は後代の補写であり、したがって古活字版の標本とはならない。東洋文化研究所本は第五丁から本来の古活字版となるので、影印にはこの丁を用いるべきであった。宮内庁本影印や、ネット上に公開されている早稲田大学図書館蔵本などと、引き比べればすぐにおかしいことに気付くことができる筈なのだが、残念である。

No. 1055 は、蔵書印及びヤブレから見ると、国立国会図書館蔵本（請求記号：本別15・13）である。書誌は正しい。



宮内庁：那波本『白氏文集』（宮内庁本白氏文集『宮内庁所蔵 那波本 白氏文集』影印版（勉誠出版、2012年3月）より）



漢籍図録 1054：那波本『白氏文集』（日本漢籍図録 p2704 より）

同じ第巻一の第一丁だが、別物である。

No. 1056 は出典の特定は難しい。

No. 1057 は国立国会図書館蔵本（請求記号：WA7・247）の古活字版である。元和二年刊とするが、それは国会図書館の解題に

「原表紙の裏貼りに裏貼りに元和二年東福寺印行の「十九史略通考」の摺り遣れが使われていることと、その同種活字を使用し、版式も相似することから刊年、出版者が推定される。」

とした上で推定のカッコを付けた「元和2 一六一六」とある記述を踏襲したものであり、正確な刊年は不明である。また、本書中で古活字版は「活字印本」として区別しているのであるから、この『長恨歌伝一卷』も刊年不明、活字印本とするべきであった。

No. 1058 もまた、国立国会図書館蔵本（WA7・193）である。慶長元年年間に六種類刊行された古活字版の内の一種類で、川瀬一馬氏の分類によれば第六種本に属す。

最後に、本の分類についてである。

本書は四部分類という、中国伝統の分類法によって本を配列している。経（儒教の經典および注釈。字書、韻書、訓詁を含む）・史（歴史書、地理書）・子（儒家も含めて法家、道家などの諸子および農学、医学、芸術などの技術書）・集（文学書）という「四」

つの「部」類に分類するので四部分類といい、また、『四庫全書』に採用された分類法であることから四庫分類ということもある。漢籍分類のために発達した分類法であるから、本書の内容にびたりと合って合理的である。だが、「小学」の分類をめぐるミスがある。

漢籍で「小学」といった場合、二つの意味がある。一つは四部分類の経部の中の下位分類である小学類（字書・韻書・訓詁学の書など、儒教經典を読み解くための文字解釈の書が分類される）であり、今ひとつは朱熹が劉子澄に編纂させた初学者用教科書の『小学』である。後者は子部の儒家類に属する書物である。

『日本漢籍図録』では、本来子部に入るべき書物の方の『小学』を、誤って経部に入れている。具体的には卷二の

- No. 205 小学内篇二卷（倭版小学）
- No. 206 小学外篇一卷（倭版小学）
- No. 210 小学集説六卷
- No. 211 標注校正小学合璧六卷

がそれに当たる。凡例でも「本図録之排序、首以経、史、子、集四部為序」（本図録の配列は経を最初にし、史、子、集の

四部の順番である）と断っている以上、これは大きなミスである。書名と分類名を混同してしまったのだとしたら、初歩的な間違いであり、本書の信頼性にも関わってくる。

おわりに

以上、書誌学の観点から縷々と述べてきたのであるが、それはひとえに本書が非常にたくさんの問題をはらんでいると言うことを検証することにあつた。

本書の後記で編者の下東波氏は「《日本漢籍図録》這對於瞭解日本印刷史、中日典籍交流史、日本漢学史等都大有裨益」（『日本漢籍図録』は）日本印刷史、中日典籍交流史、日本漢学史等に対して明瞭な理解をさせるもので、これら全てに大きな利益をもたらす」と述べているが、残念ながら不十分であるというしかない。写真に対して不正確な解説が附されていれば、読者の理解も不正確なものになる。二年半の間に一八一〇種類の書影を揃えて発刊したということには敬意を表するが、目録は書物の海をこぎ渡るための灯台となるものであり、研究においては基礎となるものであるがゆえに、拙速よりも巧遅を尊ぶべきであつた。今後、十分に補正が行われてゆくことを期待したい。

（かねき・としのり 明治大学兼任講師）